

今日は降誕後第2主日です。クリスマス祝った後、1月6日の顕現日より前に2回目の日曜日が来る場合、この日の特権や聖書日課を読むことになっています。今日の福音書は、明日記念する東の国の博士たちが宝物を持ってベツレヘムの幼子を訪問した話の後に出てくるお話です。前半は、ヨセフに天使が現れて、エジプトへ逃げるように告げたので、彼らはエジプトへ避難したことが描かれています。そしてベツレヘムの子どもたちが皆殺しにされたことが省略されていて、後半はヘロデ王が死んだので、イスラエルの地へ行くように告げられて、エジプトからイスラエルへ移動して、ナザレに住むことになったことが記されています。

私たちは、イエス様の誕生については、ルカによる福音書とマタイによる福音書を混じり合わせて理解していますが、それぞれを忠実に読んでゆくと矛盾だらけになります。

ルカの福音書では、マリアもヨセフもナザレに住んでいて、住民登録のためにヨセフの出身地であるベツレヘムに旅をして、そこで出産し、飼い葉おけに幼子を寝かせたことが書かれています。だから誕生の場所も馬小屋ということになり、羊飼いたちも救い主の誕生を見届けるためにやってきます。その後いったんナザレに帰ったのでしょうか。最初の男の子が生まれた場合には、生まれて40日目にエルサレムの神殿へ捧げものをするために出かけています。彼らは神殿でシメオンという人に会って、また女預言者のアンナにも出会って、大変祝福されるお話になっています。エルサレムの神殿の南側にはヘロデ王の宮殿もあるので、ちょっと頭をかしげます。

一方、マタイの福音書では、ヨセフとマリアは共にベツレヘムに最初から住んでいるようです。そして東の博士たちが訪ねて来たのは、普通の家だったのではないかと思います。2章11節に「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた」と書かれています。この一家はベツレヘムへ旅をしてきたのではなく、ここを起点にして、エジプトへ、そしてイスラエルへ引き返しての旅をして、ナザレに住むことになったと読めるのです。

それでは、事実はどうだったか。ベツレヘムの子どもたちが皆殺しになったというのは、事実か。私たちにはわかりません。当時のベツレヘムがとても小さな村だったということで、記録にも残らない、というのが、一般に言われていることです。しかし、このマタイによる福音書は、ユダヤ人クリスチャン向けに書かれた書物だという背景を知っておくことは大切でしょう。

イエス様の時代より1500年以上前、ユダヤ人の先祖であるイスラエルの民は、奴隷に売ったヨセフを頼って、父のヤコブは、別名イスラエルという名前なんですが、息子たち一族が故郷の飢饉のためにエジプトに移動したこと。しかしそこでやがて奴隷の身分になり、それを解放して、故郷のイスラエルに帰すために、神様はモーセを選ばれたのでした。そして、このモーセも、生まれた時に、殺される危険に逢ったのですが、パピルスで編んだ籠に入れて、ナイル川に流され、助かったのです。

こう考えると、イエス様がエジプトに避難し、そこからイスラエルへ帰国したことは、先祖たちのたどった道、モーセがたどった道を、御自分もたどられた、ということにはならないでしょうか。

今年の3月5日からは、今年も大齋節が始まります。その時には、イエス様が荒れ野で悪魔から誘惑を受けられたことを学ぶのですが、「石をパンに変えてみろ」「神殿の頂から飛び降りてみろ」「私を拝んだら、この世のものをすべて与えよう」という悪魔の誘いは、モーセがイスラエルの民を40年導いて、荒れ野で受けた試みと対応しているのです。「人々は食べるものがない」と嘆いたり、「私たちが本当に神様は導いてくださるのだろうか」と疑問に思っ神様を試したくなったり、「金の子牛」という偶像を造ったりして、ことごとく誘惑を受けたのですが、それと同じ苦しみを受けながらも、イエス様はそれに打ち勝った、ということを私たちはここから学ぶのです。

今から20年前ですが、イエス様が処刑されるまでの12時間を描いた「パッション」という映画ができました。イエス様は鞭で打たれ、肉片や血が飛び散るような苦しみを受けたのち、十字架に架けられる様子が描かれていました。私は今までこんな悲惨な受難の映画を見たことがありませんでした。マスコミもこの描写に対しては、批判的なものも多かったように思います。

しかし、そんな中で私が思ったことは、「イエス様がこんなに苦しみを味わわれたのなら、私の痛みも理解して下さるに違いない。カッコいい英雄には、弱い者の気持ちなど理解できないだろうが、苦しみをぬく経験をした人なら、人々の痛みを理解し、重荷を負ってくださることができる。』ということでした。

マタイの福音書は、ユダヤ人のために書かれた、と言いましたが、ユダヤ人別名ヘブライ人のために書かれた聖書として「ヘブライ人への手紙」というのがあります。それには、イエス様を紹介するのに、神様と人間をとりなす大祭司であると表現しています。

偉大な大祭司イエス（ヘブライ人への手紙）第4章14節から16節

『4:14 さて、わたしたちには、もろもろの天を通過された偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのですから、わたしたちの公に言い表している信仰をしっかりと保とうではありませんか。 4:15 この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。 4:16 だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。』

私たちは、今日の福音書を通して、イエス様がその誕生からの数年、イスラエルの先祖たちのたどったエジプトへの避難やエジプトからの帰国の道をたどられたことを知りますが、それだけでなく、イエス様は神様の所から人々を眺めるのではなく、共に苦しむために、そして人々の友となるために、人間になられたことを、あらためて確認したいと思います。そして私たちと共に歩んでくださるイエス様に頼りながら今年の歩みを続けたいと思います。